

放出です。A3用紙を二つ折りにした4ページ物です。年に3回、不定期に発行します。紙面では「こんな事業をします」、「こんな話し合いをしました」、「こんなことがありました」といった内容やトピックという形で「新しい方が移住されてこんなことをお願いしています」といった内容を紹介しています。

そんな中で真庭なりわい塾というのが中和地域をメインステージにして開塾しました。これがまた地域の人に大きな意識変化をもたらしました。

真庭なりわい塾というのは都会に暮らす若者に中和のような山村で何か自分の価値観を大切にしたい暮らし方働き方を勉強してもらおう場です。毎年20名から25名の塾生を受け入れました。申し込みが多いものですから選考します。

そうした形でやっていますが、1年目は座学、地域の人との交流をします。2年目はその中で自分のやりたいことを実践します。たとえば農業、あるいは地域づくり。これが実は中和になじむかなと思っていましたら、座学でお年寄りが先生になってくれて、地域に新しい風が入っています。

それから新鮮な食べ物を地域の人に届けたいという野菜プロジェクトがあります。家庭菜園をもう少し頑張っていって販売しましょうという、生涯現役を目指した取組です。そうしているうちに中和サポーターズクラブという子育て支援をしようという動きが始まりました。これは30代の女性が始め、現在70名まで登録が増えています。こうした動きがいくつも出てきたことがすごいことです。

さらに昨年、空き家調査をしました。空き家が増えてきており何かさびしいなという感じでした。そこで塾生と一緒に地域で調査してみようということになりました。すべての自治会が参加し、その結果、空き家率が23%でした。しかし15の空き家がまだ活用でき、さらにその所有者の方が貸すか、売るか、について協力的であることがわかりました。この15件は資源になるということがわかり空き家を移住者の方に提供するだけでなく、自力で再生しようという動きが出てきています。

このスライドが移住定住の推進体制を表したも

のです。空き家のマッチングをしたり地元との付き合いをアドバイスしたりという流れで移住定住、あるいは関係人口づくりにいそんでいます。

これが薪プロジェクトの実際の現場です。子供たちも、ふるさと学習の中で竹筒燃料棒を作っています。

この写真は野菜プロジェクトの様子です。週に1回野菜を集めています。この写真は社会福祉協議会の事業の様子です。この事業により1軒1軒見守りをする場作りができています。年に1回見直しをして見守りなどの活動につなげています。この写真がなりわい塾での活動の様子です。空き家調査をしましたが、自治会長さんに案内をお願いしました。塾生たちが1軒1軒回って記録していきました。この写真はいきいきサポーターズクラブです。中和の小学校・保育園合同運動会の支援をお願いしています。こんなことをやってもらっています。それから空き家対策。今、塾は3期生ですが、2期生と一緒に空き家の改修をやりました。大変な作業です。壁を塗ったり、床を張ったりしました。改修工事が夏前にめどが付き、小学校の学習支援としてサマースクールをやりました。先日は地元の人と一緒にプレオープンイベントをやりました。

中和地域づくり委員会では、約12の事業を継続してやっています。それからふたつの祭りがあります。中和紅葉祭という農林業文化祭、11月3日です。8月13日に中和ふるさと祭りという盆祭り、これは若者たちが中心になってやります。こういうことも継続的にやっています。

これは草刈り、花壇づくり、3世代交流イベント、こんなことも毎年やったり、新しいことを始めたりしています。これは中和紅葉祭の様子で、11月3日、体育館の中で演奏したり販売したりしています。まさにオール中和で、すべての自治会と団体で実行委員会を作って行います。これはふるさとまつり。年に1回、地域の住民も寄付をします。それから花火大会。小さな、わずか10分ほどの小さな花火大会があります。

終わりに、私たちが望む未来はということまでまとめています。できる人ができることをできる範囲で

頑張ろうというのが呼びかけです。

私たちの目標を3つあげます。1つめは人口は減るけれど、中和小学校を存続できるだけの人口と世帯数を作ろう。移住定住です。

2つめは年をとっても稼ぎをみんなで作っていきこう。たとえ小さくても稼ぎを作ろう。

3つめはいろいろな方、子供からお年寄りまでが居心地のよいコミュニティを作りましょう。移住者にとっても風通しのいいコミュニティにしましょうというのが3つの目標です。これを4月の地域づくり委員会で協議して決めたわけです。

この中和いきいきプロジェクトのコンセプトは、庭先野菜が行われ、なりわい塾が始まり、今年から空き家再生プロジェクトが新しく動いています。これから若い世代からの発想が出てくることを期待しています。ということで、まだまだ道半ばなのですが、皆さんに伝われば幸いです。ご清聴ありがとうございました。

**宮口**／ありがとうございました。真庭市は「里山資本主義」という本でずいぶん有名になりました。広域合併をされた、その中のいちばん奥地という用語弊がありますが、小さな地区ですね。旧中和村。しかし、そこがいちばん、地区としてはいちばん活発に活動しておられるということです。

私たちは、旧小学校区くらいの単位で新しい地域運営組織を立ち上げ、集落ネットワーク圏として支え合うことが、地域の暮らしを豊かにする可能性が強いと、過疎問題懇談会等で申し上げてきました。昨日の表彰の中にもそういう事例が多かったのですが、その代表的な例だと思います。小学校サポーターズクラブという、PTAを超えて、子供のいない人も一緒になって支えるということもなさっている。

真庭市はバイオマスなどで農山村の価値を世界に訴えておられるわけですが、その一方で、なりわい塾という都市の人に直接中山間地域の価値を伝える取組を、中和地区が面倒見る形で引き受けられたんですね。その結果都市の人たちがたくさん訪れるようになりました。小さな地域の頑張りです

が、それをまとめて支えているのが中和地域づくり委員会という組織だということです。はい、ありがとうございました。

それでは続きまして4番目の事例発表に移りますが、愛媛県伊予市、まちづくり学校双海人。これは任意団体ですが、学校と名乗っておられます。この双海人のちゅというのは沖縄の海人（ウミンチュ）からかっこいいだろうということで名付けられたようですが。はい、それではよろしく願いいたします。

### まちづくり学校双海人（愛媛県伊予市）

⑤ふるさとを愛し、④たのしく学び、③みんなが幸せになる  
～地域の担い手を育て、移住者も一緒に幸せづくり～

**高村**／皆さん、こんにちは。これから、私たちまちづくり学校双海人の取組についてご紹介させていただきます。私はこのまちづくり学校双海人の校夢員をしております高村真理と申します。どうぞよろしく願いいたします。

しずむ夕日が立ち止まるまち、愛媛県伊予市双海町です。

**宮口**／合併前の双海町が沈む夕日で、ものすごく売り出していたのですね。

**高村**／はい。まず、初めに私たちの暮らす伊予市双海町がどこにあるかご説明いたします。双海町は愛媛県にあります。愛知、じゃないよ、愛媛だよ。双海町は伊予市にあります。双海町はここです。伊予市双海町はどのようなところかご紹介いたします。伊予市双海町は瀬戸内海に面し、海岸線が15キロ、奥行きが4キロほどの海沿いに細長い町です。とても小さな町ですが、海からわずか数キロのところ、1,000メートル級の山がそびえたっています。

伊予市双海町ってどんなところ？まずは町の大きさです。伊予市双海町は33の集落が存在し、その

すべてが自治公民館を持つという、合併前から現在もお盛んな公民館活動が行われています。人口は載っています。高齢化率46.2%となっています。すみません、こちらのように、高齢化率、0歳から14歳までの子供の割合は6.8%になっています。この数値をあげていこうという取組も行われています。

伊予市双海町ってどんなところ？ 続きまして産業です。双海町にはふたつの港があります。鱧やしらす漁が盛んに行われています。また温暖な愛媛ですのでみかんやかんきつ類、キウイフルーツなども生産しています。続いて双海町のみどころを紹介します。伊予市双海町は「しずむ夕日が立ちどまるまち」というのをキャッチフレーズにしています。美しい夕日と豊かな海の風景が魅力です。最近はおつて日本一海に近いといわれています無人駅・下灘駅にもたくさんの観光客が訪れています。

さて、お待たせしました。ここからが本題、まちづくり学校双海人についてご紹介させていただきます。まちづくり学校双海人は地域住民による地域活性化の学び舎です。

まちづくり学校双海人は伊予市双海町に新しいビジネスを合言葉に平成24年4月に発足しました。その校訓は「ふ」「た」「み」の頭文字をとって、ふるさとを愛し、楽しく学び、みんなが幸せになるとしています。

学校運営の特色としては、性別や年齢、立場や役職などに関わらず、みんなが対等で、いいと思ったことをやってみようということを基本にしています。こちらが組織図です。学校全体を統括する校長や教頭、校夢員は広告塔的な存在の私を含め美女軍団、各種の連絡やスケジュールなどの管理を行う事務局に用夢員、そして地域の皆さんを中心とした学生で構成されています。

こちらは校長や校夢員、用夢員による職員会議の様子です。私たち美女軍団、かな？も写っています。

定例会でのワークショップの様子です。ご覧のとおり、高校生の参加もありました。彼は双海人のレポートを書いてAO入試で愛媛大学に合格しまし

た。

まちづくり学校双海人のスタートから6年半、私たちの双海町にはさまざまなものやことが始まっています。しずむ夕日が立ちどまるまちの軽トラ市。地域のささやかなにぎわいづくり、毎月最後の土曜日に開催されています。

市民映画をつくろうプロジェクト。伊予市制10周年を記念して市民映画の制作を行いました。「あなたの大切なものはなんですか？」と皆さんに聞いて、それを映画に作りました。

幸せの黄色いハンカチ。市内2,000人の子供たちが将来の夢を描いたハンカチを展示しました。双海の海はとてもきれい、みんなの願いがなびいてきれいでした。

下灘コーヒー。もしかしたらご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、何もなかった無人駅下灘駅の前にカフェがオープンしました。インスタ映えする新たなスポットとして海外からのお客様もいらっシャっています。今は、土日はすごい人で、観光客でいっぱいになっています。

米ぬか酵素風呂。すみません、私の宣伝になるかもしれませんが、私も四国で初めて米ぬか酵素風呂をオープンさせていただきました。そして双海町の多くの方に健康と癒しを届けています。

デザイン屋。地元出身の若者が広告デザイン会社を立ち上げました。

翠小学校。愛媛県で最も古い現役の木造校舎が自慢です。平成24年、まちづくり学校がスタートした時は全校児童が15人しかいませんでした。若返り玉手箱、移住交流で学校を救えということを始めまして、何と今年4月には児童数が22人に増えました。

ケアサポートとにかく笑えれば。神奈川県からの移住者が訪問介護事業所を開所しました。パン屋107。東京から6人家族で移住して来られたいとうさんがパン屋さんをオープン。今ではテレビの取材が定期的に入るくらい人気のパン屋さんとなりました。お店のないところで毎日焼き立てのパンが食べられるようになりました。

伊予市移住サポートセンターいよりん。双海人の

移住への取組が広がって、民間の移住サポート窓口が開設されました。

このようにさまざまなものやことを生みだした双海人ですが、ただいま7年目。7年目に入りますと、活動も参加メンバーが固定化。新しいメンバーの参加が徐々に少なくなってきたりして、ちょっとマンネリ化したというのが今の悩みではあるのですが、定例会にお招きするゲストの人選も毎回苦労していますが、みんなでどんどんアイデアを出し合って頑張っていこうとしています。

そういうことも、皆さんと一緒に今日こういう形で全国的な勉強をさせていただきましたので、持ち帰って双海人のメンバーに学ばせていただきたいと思っています。

以上、駆け足でお伝えしましたが、これでまちづくり学校双海人の発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

**宮口**／まちづくり団体が学校と名乗って活動組織を立ち上げて、男は用夢員、女性は校夢員で、そこに夢という字を使い、夢のある組織をつくったわけですね。

教頭先生は確か、都会から来た元地域おこし協力隊員の人で、マネージメントが得意な人と思いました。プレゼンのパワポはスマートでしたね。思いのある人たちの活動が移住者を呼び込み、パン屋さんなどの起業につながっています。双海人の活動の中からもいろいろ派生していったということですね。そうやって地域が元気になっていきますね。軽トラ市の写真があったけど、軽トラは売ってないんですね。

**高村**／軽トラを売っているわけではなく、それに品物を乗せて販売するんです。

最初は軽トラを売るとおっしゃる方もありましたが。

**宮口**／任意団体、有志の集まりですからね。これがこういうふうには持続して地域を支えておられるということはとても素晴らしいということで、表彰の

対象になりました。あとでまたいろいろ質問していただきたいと思います。

それでは続いて、四国の秘境、山城・大歩危妖怪村です。徳島県三好市から来ていただきました。

妖怪をテーマにした地域づくりということで、昨日、私、全体会の合間に徳島から来たNHKの取材を受けました。地元でも関心と呼んでいるようです。今日、ぜひゆっくり聞かせていただきたいと思っています。よろしくお願いします。

### 四国の秘境 山城・大歩危妖怪村 (徳島県三好市)

#### 山里に伝わる妖怪伝説を核にした 地域づくり

**平田**／離れ小島の四国からまいりました四国の秘境 山城・大歩危妖怪村の事務局長をしております平田と申します。今日はひとつよろしくお願いたします。

四国の秘境 山城・大歩危妖怪村というのは、あまり地理的なことは話さない方がいいとあったのですが、ひとつだけ、地理的なことだけ言いますと、これにありますように、四国のちょうど真ん中辺ですね。四国山岳の山肌には人家がはりつくようにして生活しているのが私どもの妖怪村でございます。

たぶん、この会場においでの方々の家では自分の子供が自分の家の庭から落ちて命を落とすというようなところでは生活されていないと思いますが、私どもの村では自分の家の庭から子供が転落して命を落とす、それだけ、地元の言葉で言いますと「さがしい」場所でございます。

この妖怪村の設立は2008年の8月に任意団体として設立しました。有志の皆さん方が集まったということで、役員数は10人で、会員数は17名。これはそれぞれ地域の団体、たとえば公民館の公民館長さんが入ったり、青年団の方が入ったり、PTAの方が入ったり、そういう団体の代表の皆さんに入って

いただいてそれで17名ということで、その下にはもっと多くの人たちがつながっているということです。

一応、妖怪村という組織にしていますので、昨日表彰状をいただきましたのが村長です。助役、収入役もおります。組織としてはそういう組織立てにしております。

結成の経緯ですが、妖怪村の設立は2008年ですが、それに至る前に前段として1997年平成9年に、地元の、藤川谷という川がありまして、この川沿いに有志が集まって藤川谷の会というのを設立しました。これも任意団体です。

この藤川谷の会は、入る地域が限定されております。これはこの川の水を活用したり、川沿いに紅葉を植栽して環境美化をしようと活動を始めたのがこの藤川谷の会です。

その次に平成10年、1998年に徳島県内の妖怪愛好家の多喜田さんという方が妖怪児啼爺の伝承地が徳島県内のどこかにあると、これは柳田國男さんの書物に阿波の山分に伝わると書いていましたので、この多喜田さんが山城町に調査に入っているいろいろ調べられて、2年後に柳田國男さんの書物と柳田國男さんの弟子の方が書いた書物をひもときますとその中に、私どもが活動しています地域で聞きとったという記述が出てきます。

それともうひとつは、子供のころに「悪さをすると児啼爺が連れに来るぞ」とじいさんやばあさんから言われたことを記憶していたというお年寄りの方が出てきて、それで児啼爺の発祥の地はこの山城町という決定をされたわけです。

決定をされて、これを伝えた方が2000年に亡くなりましたので、これは何か残しておかないとまた同じことが起きるのではないかと、忘れ去られるのではないかとということで、何か形にして残しておくということで、児啼爺の石像を立てようということになったわけです。

石像をたてるといっても、妖怪村ができていたわけではありませぬので、それまで活動していた藤川谷の会に相談を持ちかけて、喧々囂々の話になりましたが、最終的にはやらざるをえないだろ

うということで決議をいただいて、全国から支援をいただきました。

これは作家の京極夏彦さんをご自身のホームページで呼びかけて、費用が全国から集まり、2001年の11月に児啼爺の石像がたちました。11月に石像の除幕式をやりましたが、このくらいから妖怪まつりらしきものが始まりました。

そして2008年に世界妖怪協会から怪遺産として認定を受けたと。世界妖怪協会というとてもない組織のように聞こえますが、会長は水木しげるさんです。この会から認定をされました。第1号は水木さんのふるさとの境港、第2号が私ども、第3号が岩手県の遠野市ですが、4号はまだ認定されていません。その年の5月に怪遺産の認定証を京極さんがわざわざ四国の辺境の地、山城町まで持ってきてくださいました。その年の8月に四国の秘境山城・大歩危妖怪村を設立したわけです。

児啼爺発祥の地ということでこれを何とか活用していこうと、この画面にありますように、これはJR大歩危駅です、大歩危の駅長に児啼爺が就任しました。これはJRさんから認定をいただきました。ちなみにこの大歩危駅というのは大股で歩いても危ないというのがよく説明されますが、これは間違いで、ほきということばが原語でして、ほきというのは危険な場所、屏風をたててその上を歩くほど危険な場所というのがこの大歩危の名前の由来です。

僕らの活動内容ですが、ひとつには妖怪を利用した妖怪石像の設置です。児啼爺は石でできていますが、石で作ると費用がものすごくかかります。お金がないわけですし、できるだけお金のいらぬ方法でということになりますと、身の回りにある手頃なもので作らなければならない。これは木です。地域にある木を伐って、のみで彫ってさまざまな妖怪の像を作りました。

そして道のあちこちに、妖怪が出そうなところ、妖怪伝説が伝わる場所に設置しました。それからいろいろな活動が始まりました。そのほかにも祭りとして、妖怪の里歩きということで、これがもとになりましたが、木彫りの妖怪を自分たちで彫って道

のあちこちに置いて妖怪の里歩きのコース巡りができるようにしました。

これは何をしているかという、これは児啼爺の像を作っています。毎年妖怪まつりの時に更新しています。

それから妖怪の里歩き、これは児啼爺の石像の場所で、説明をしているのは私です。妖怪の里歩きコースを巡る案内をして、来ていただいた皆さんからお金をちょうだいしましょう。この2,500円というのは7.5キロの山道を歩く。7.5キロも歩きますから、朝スタートしても帰ってくるのは午後になる。ということで、地元の皆さんが作った弁当を食べていただいて、お茶は地元の茶業組合が作った妖怪茶を飲んでいただいて、歩いていただくということをしています。

そのほかに、妖怪で売り出したものですから、来た皆さん方に少しお金を落としていただくということで妖怪グッズを出しています。私どもがいちばん中心に置いているのは、この「おとろしや」という本です。妖怪村が編集して印刷して販売しています。実はこの「おとろしや」は2版になっています。1回の印刷部数が1,300ですから、これは2回目、2版に入ってそれを販売しているということで、こういった本を売っていわば活動資金を稼いでいるということで活動を継続させています。

そのほかには大歩危が観光地ということで、激辛クッキーみたいなおみやげも売っています。ひとつだけトウガラシが入った辛いクッキーが入っている、そんなおみやげも売っています。こんなものをグッズとして販売して、そのリポートをいただいて活動しているということです。

そのほかにも巨樹巨木調査、地元の資源をどのように活用するかということを考えれば、冒頭地図で見ていただいたように四国の真ん中にありますから、子供が落ちて命を落とすような急峻な場所ですから、当然、古くからの大きな樹木が残っています。残っている場所をずっと調査して本にして、これも販売してお金をいただく。しかし、この木はどこに行ったら見えますかというようなことはあまりやっていません。なぜやらないかという、巨木が

あると、必ずそれを儲けに使おうという方がいて、除草剤を注入して枯れさせてお金に換えていくという輩がいるので、できるだけ、ある場所はわからないようにしているつもりです。

そのほかに2001年から始まった妖怪まつり。これは県道です。県道を利用しないとまつりができません。かすかに広場がありますが、県道沿いにある、トイレがある程度のちょっとした公園です。この場所で妖怪まつりをすると、集まるのが800人から1,000人くらい。どうしても道路にはみだすので、警察に「来年からはちゃんと届けを出して下さい」といわれて、それからちゃんと届けています。警備員を配置してやっています。

これは今年の妖怪まつりですね。これは小学生が児啼爺の仮装をして龍神みこしを担ぎます。今年の妖怪まつりをもって地域を歩くことがなくなりました。これはこの怪フォーラムのスタートが次世代の子供たちに妖怪を引き継ごうというのがひとつの目的だったのですが、今年の怪フォーラムをもって、先ほど言いましたように、子供たちが妖怪まつりに登場したり研究発表を怪フォーラムでやったり、境港、遠野、三好でやっていました。こういうことで怪フォーラムはもう地方に出てやることはありません。

最後に課題です。これはどうしても、過疎と深くかかわってきています。人口がどんどん減るのはどこも同じですが、今後取組の課題ということでいいますと、活動する人材がどうしてもなかなか確保できないということがありまして、これを何とかしなければなりません。

活動を一緒にしてくれる人間の拡大をしなければならぬということ、妖怪を活用したさまざまなグッズ、これを作って販売する知恵を持った人が関わってくるとありがたい。私どもは素人集団なのでなかなかうまくできません。

妖怪村のほかの組織として、株式会社妖怪村というのがあります。これはものを売って活動資金にするという組織になっていますので、そんなのを活用しながら、専従ができるようなものを将来的には考えていかなければいけないということです。

**宮口**／はい、ありがとうございました。旧山城町というのは私もお邪魔したことがあります。四国の山地は本当に急斜面に集落があるのですが、その中でも一番の急斜面に家があるようなところですよ。

児啼爺のふるさとであると判明したことでそのような活動が始まった。グッズの販売などで収入を得たいというお話でしたが、今の活動の方がかわいくて妖怪に合うような感じがしないでもないですね。余計なことを申し上げました。

はい、これで5つの発表が終わりましたが、あと10分くらいしかありません。これはぜひ聞いておきたい、あるいは発表を聞いてこう考えたというようなご発言、会場からごさいませんでしょうか。

はい、どうぞ。マイクはありますか？

**A**／福岡県田川郡香春町というところから来ました。私どもの町も人口が1万9,000人くらいです。

いちばん近くで、私たちもよく利用させてもらっている俵山の方にお聞きします。旅館が40軒、今は23軒になった。その中の何軒くらいをどのように利用しているのか。

その旅館は無償で借りているのか。そのへんをどのようにしているのか。

**村田**／今NPOで活用しているのは1軒です。どういった活用をしているかというのは空き家旅館を改装をして、最初の目的は長期間いてもらって、俵山を見てもらって定住につなげたいということで始めましたが、温泉に来て滞在される方にも利用してもらっています。

1泊2,500円で、食事はつきません。そんな感じでやっています。もともと持ち主がいらっしゃいますので、そちらに固定資産税にちょっと上乘せしたくらいのお礼をして使っています。

**A**／その事業の費用対効果はどうなっていますか？

**村田**／始めてから、かなり利用者がいらっしゃっておりますが、なかなか定住にはつながっていません。

ん。

**宮口**／その程度のお金のやりとりでやっているという話ですね。ありがとうございます。そちらで手を挙げていた方どうぞ。

**B**／すわったままで失礼します。それぞれの地域の方、まちづくりの表彰、おめでとうございます。1点だけお尋ねしたいのが、普通の民間企業と違って、たとえば地域であったり町であったり村であったり、地域を巻き込んでの活動は、当初は有志が集まったところから始まるのでしょうか、事業が大きくなったり、長年にわたったりすると社会的な責任がついてくる。

ある日突然、高齢化社会で事務局も年をとったからやめるよというわけにいかない。地域住民が応援したり期待したりということがまちづくりの場についてくると思います。

そこらあたりで、最後の山城の方は、そのあたり苦勞していると聞かせてもらいましたが、ほかの4名の方に、事務局としての活性化というのもあるでしょうが、今後つなげていくためにどんなご努力、特筆すべきことがあったら教えていただきたい。

**宮口**／それでは上士幌さんから、今後の持続性に関する質問だと思いますので、どんな手を打っているか、と。

**川村**／活動している人の年齢は私が上のほうで、皆さん30代とか40代とかですので、特に今のところは問題ございません。

まちの人たちを巻き込む必要がどうしてもないとまちづくりになりませんので、あちらの方たちは、どちらかというシニアの方たちが多く巻き込んでくれますが、若い世代も、子育て世代の移住も増えていますので、移住された先輩の若い人たちとのつながりを私たちの中でつなぐということをしていますので、そういうことでいいですか？

**宮口**／はい。俵山はどうですか？ だいたい高齢化

もしていますよね。

**村田**／もともと青年部から始めたのですが、それがそのまま年を取っていますので。ジビエのほうもお互いに声をかけて入ってもらってやっていますが、次世代に引き継ぎたいのですが、なかなか若い人に全部を任せるわけにもいかない。かなり問題ではあります。

**宮口**／ある時期、みんなで頑張ったのがそのまま年を取る事例は各地にあります。中和の場合は相当高齢化していますね。

**大美**／しっかり高齢化して困っていますが(笑)。地域づくり委員会、この委員会は自治会の代表の方、各種団体の代表の方で構成されています。ということは役が替わると入れ替わる。ひどい場合は毎年入れ替わってしまう。いい一面ではみんなが参加して知ってもらえるといういい面もある。ただいつも「初めまして、よろしく」ではなかなかうまくいかない。これが課題といえば課題です。

それから情報提供を地域の皆さんに丁寧に行っていくということがいちばんかなと思っています。それから最近、特にうれしいのはIターンされている方も含めて若い世代が提案したり行動したりしてくれるようになった。これがいちばんの財産だと思うんです。若い人が出るようにしないと、ほめて一緒になってやっていくようにしないと未来はどこかで行き詰る気がします。

それから、事務局のことで。事務局は課題です。大きな課題です。私は代表で、かなりのことをやっていますが、これを何とか、人が替わっても継続できるようなやり方をしていけないといけないと考えていまして、先ほど商店の改修もありましたが、そこを拠点にして、市のほうも新しい施策を考えてくれているようですが、持続可能な新体制を作ろうと考えています。

**宮口**／大美さんが相当ひっぱり来ておられますが、だけど若い人がかなり続いてくれるようになって

て地域は受け継いでくれそうだという頼もしい話でしたね。双海人はどうですか？

**高村**／以前は高校生とか若い子も一緒に勉強していたのですが、私たちがメンバーの固定化、マンネリ化が課題になっています。これからはもっと若い世代の方をたくさん、アイデアを出していただきながらみんなで頑張っていきたいと思っています。

**宮口**／はい、ありがとうございます。それではもうひとりどうぞ。

**C**／上士幌町の方に聞きたいのですが、平成24年が1,500万余って、平成28年が21億という数字が出てきたので、どこにヒントがあるのか、そのヒントを聞きたいのと、もうひとつは、そのお金を子育て支援の方に回されたということですが、どれくらいを回されたのかということをお聞きしたい。

**川村**／私ができる範囲でお答えすることになりますが、私もふるさと納税の感謝特典が始まった時から一応そばで見えていましたので、今はうちがやるようになっていますが、まず年度、1月から12月のあいだでひとり1回というのを抜いた時点でだいたい来ようになりました。

そのあとクレジットを入れていますので、クレジットでの受付可能というのでますます伸びています。もともとメディア戦略がすごく強いまちですので、そこでの戦略というところで、ふるさとチョイスが始まった時にうちが大きく関わっているところから、そこでひとり1回というのをなくすこととクレジットが始まるということが大きな要因になっています。どれくらいかというのは35%だそうです。35%が町の利益で、できるだけ、今3割と言われているところは上士幌町、きちんと守らせていただいているので、このあいだも新聞でおほめをいただいていたようですが、そちらはうちの担当のほうも強く意識させてもらって、生産者さん、町の人に迷惑がかからないということが大事なことなので、そこは私た



ちも意識してやっているつもりです。

**宮口**／どうもありがとうございました。では最後にどうぞ。

**D**／皆様、今日のお話は、まさに自立を実践されてこられて、志の高さとか地域のコミュニティがすべての基盤になっていることがよくわかりました。うちは、地域おこし協力隊、日本で一番多くて41人います。通算で78人で、定着も60%になっています。

町自体に政策の目標があるとみんなそこがチャンスだということで、決断できるかどうかというのは、自分の人生と一緒に、地域も一緒に、ビジョンがあるかどうかということが非常に大きなことだと思います。そこで政策と地方起こしの理念が合致しているとうまく回っている。

皆さん方、一言ずつでいいですが、地域行政と仲いいですか？ あてにしていますか？ 頼りにしていませんか？ そこだけ、一言だけ聞かせてください。

**宮口**／はい、では一言ずつ。

**川村**／うちは一緒にやっておりますので、とてもなかよしです。

**村田**／うちもいろいろ支えてもらったり、日頃から見守ってもらっている感じがします。

**大美**／極めて良好で非常にいいです。産官の関係、非常にいいです。

**高村**／うちも一緒に参加していただいているので。

**平田**／私はできるだけ行政に頼らないということの基本にしておりますので。行政のほうを利用していいといったほうがあたっていていると思います。

**D**／ありがとうございます。

**宮口**／はい、どうもありがとうございました。

時間がありませんので、これで質問やご意見は打ち切りにさせていただいて、討論をまとめるというよりは、簡単なコメントでお許しいただきたいと思っています。

上士幌コンシェルジュという組織は日本の先端をいっているものだと思います。町がやるべきいろいろなことを民間がやって、さらに自分が活性化するのがベースにあるのですが、さらに自主事業を展開されている。これは持続可能性という点でも重要なことだと思います。

ゆうゆうグリーン俵山さんは温泉町を何とかしようというところにグリーンツーリズムを乗っけて頑張っておられ、学生インターン事業なども取り入れられ、空いた旅館の活用、地域の基本的な交通、児童のスクールバス等々、いろいろなことを受託されて、今や地域になくはならない存在だと思います。

中和地域づくり委員会は、かなり有名になった真庭市のいちばん小さな中和村というところで、人と人とのつながりから、お年寄りが山から薪を切ってきてそれが経済循環になるという仕組みが生まれ、都市の住民に直接地域の価値を伝えるなりわい塾の活動も元気のもとになっています。小学校のサポートも素晴らしいです。

まちづくり学校双海人は、本当の有志の集まりということで、いろいろなアイデアがあって、学校というユニークな組織からいろいろなものが派生しています。市民映画の制作や軽トラ市など、多彩な取組には頭が下がります。ただ、任意団体であるがゆえのこれからのいろいろな課題もちょっと見えてきているような気がします。

四国の辺境 山城・大歩危妖怪村は本当に日本の山村のユニークな地域資源、これを活かして頑張っておられます。怪フォーラムや妖怪まつりなどにはたくさんの方が来ていますが、ただ、関係者は高齢化もされているので、次の展開が見えてくるというふうにご自分でもおっしゃっておられました。

今日の5つの発表は本当に多彩な事例でしたが、ぜひご参加の方々に、これらの活発な活動の感じた部分を共有していただくことをお願いして、この全国過疎問題シンポジウムの分科会を締めくくらせていただきたいと思います。2日間本当にありがとうございました。それでは発表の方々にもう一度大きな拍手をお願いして終了とさせていただきます。



# 長門市現地視察

元乃隅稻成神社



センザキッチン

